

経済史 2009.10.26

## 5. 封建社会の動揺

### A. 封建社会の特徴

#### 1) 国家

ローマ帝国の崩壊→政治権力の分散、

フランク王国は封建制を基礎とする封建国家

国民国家、近代国家ではない

前近代国家では、国家と家族・親族の領域とが未分化の状態だった（家産制国家）

所有権の多層的構成（上級所有権と下級所有権）

一元的な財産権（私的所有権）は存在しない

経済関係が支配・従属関係によって規制される（経済外的強制）

市場経済が本格的に展開する前提条件はできていない

封建社会などでは国家は常備軍を持っておらず、戦争は貴族の私兵や傭兵などによって担われるのが通例であった

→国王権力の限界

#### 2) 市場

商品交換は行われていた；封建制は反貨幣経済ではない

中世初期にもデナリウス銀貨が広範な流通

基本は局地的商業（都市内、都市と周辺農村）

手工業は典型だが、見込み生産ではなく注文生産

市場での競争がギルドや都市当局によって規制を受けていた

10～11世紀以降は「商業の復活」により遠隔地間商業が復活

北欧と南欧がシャンパーニュの大市、ブリュージュで接するヨーロッパ規模

アジアとは間接的につながっているにとどまった

取引商品は奢侈品であり、アジア物産を銀・銅と交換するという形態

ヨーロッパ人はアジア物産を欲した

近代以降の国際分業とは性格が違っていた

商品交換と市場圏の拡大は経済活動の活発化をもたらし、封建社会の再編に繋がった

しかし商品交換の活性化と市場圏の拡大→封建社会の解体と近代資本主義の成立へ

#### 3) 共同体

村落共同体、都市共同体（ギルド）など共同体の原理が社会を隅々まで覆っていた

共同体の構成員は共同体の規制を受けた（自由を制限された）が、経済的格差を生み出しつつも、共同体の保護を受けて最低限の生活は保障されていた

都市のツンフトも、熟練や品質という点で評価すべき面をもちつつも、資本主義や市場での競争と相容れない面をもっていた→領主制やツンフト制は「農民解放」、囲い込みないし「営業の自由」という形で廃棄される運命

## B. 「封建的危機」

封建社会の拡大→13世紀にピークを迎えた

背景：西欧における7世紀以降の温暖化⇔封建社会の拡大

←→13世紀以降の寒冷化→作物の限界生育地の縮小

14世紀に入って相次ぐ不作と飢饉（1315～18年の大飢饉）→人口の低下

百年戦争（1337～1453年）

1347年頃から西欧一帯で腺ペスト（黒死病）が流行（←「細菌による世界の統一」）

ペスト流行の5年間にヨーロッパの人口の1/3が死亡

1340年 7350万→1500年 5600万

14～15世紀は西欧封建社会が7世紀以来の「成長」から「収縮」に転じて危機に瀕した時期であった（「封建的危機」）

「中世末の荒廃」：耕地の放棄、都市や村落の消滅

## C. 各国の様相

### 1) イギリス

封建社会のなかでは辺境に位置していた

→領主制の展開は大陸よりも遅れかつ緩慢

農奴制・賦役制を基礎とする古典荘園制（マナー制）形成の動きも11世紀に顕著になり、この趨勢は12～13世紀に進展（特に東南部の修道院領）

←→14世紀に入ってマナー制は解体

→地代が貨幣形態で徴収されるようになった（「賦役の金納化」）

イギリスでは単なる形態変化だけでなく

地代水準の低下、農民の地位上昇、封建領主制の実質的解体が起きた

←→

理由：イギリスでは封建領主制が強固に根を下ろさず、農民の領主に対する自立性が大陸と比べて強かった

黒死病流行(1348/49年)中の「労働者規制法」

農業労働者の移動を制限し、黒死病以前の賃金で働くことを法的に強制

←労働力不足の表れ

農民一揆の多発（1381年のワット・タイラーの乱）

ワットタイラーの乱：百年戦争真っ只中→人頭税を課税する動きがあったための反乱

向上しつつあった農民の経済的・社会的地位を領主から守るためのもの

### 2) フランス

13～14世紀に古典荘園制が、特に北部と西部で解体した

←→中部、南部、東部では古典荘園制が15世紀になっても存続

黒死病の流行（1348年）、農民一揆の発生（1358年のジャックリーの乱）

→北部・西部ではイギリスに近い農民の地位向上が見られた  
しかし 15~16 世紀以降、都市の富裕な市民が領主直営地を次々に買い取って農民に小作に出し生産物地代を収取する「寄生地主制」が成立  
→アンシャン・レジームの経済的基盤  
←理由：フランスの都市が輸出工業をもたなかったため、都市市民が商業や官職の収入から得た余剰資金を商工業ではなく、周辺農村の土地集積に振り向けた  
→都市資本の農村介入は、領主制の廃棄ではなくその延命・再生という結果をもたらした

### 3) ドイツ

西部と東部とで分類。

西部（エルベ河以西）：

12~13 世紀に古典荘園制が解体し、生産物地代や貨幣地代を負担する純粹荘園制／地代荘園制が一般的になった

領邦国家レベルでの国家の形成・整備の進展

領邦国家による増税、領主による地代引上げの動き

←宗教改革の進行とも関連して「ドイツ農民戦争」（1524~25 年）が勃発

→鎮圧され、19 世紀まで領主制が存続

←→

東部（エルベ河以東）：

「農場領主制」、「再版農奴制」（ゲーツヘルシャフト）の成立

『東部ドイツ農民』の行われた植民地域で農民の社会的・経済的地位は西部より良好

←16 世紀頃から西欧の穀物需要が増加

→領主直営地の拡大、領主裁判権の贈与・売却、人身支配権の復活

→領主直営地において農民の賦役労働に依存する西欧市場向け（輸出向け）の大規模な穀物生産が拡大

### 4) 差異の理由

国による違いはどこから来たのか？

コスミンスキー（ロシア）の所説：

商品経済の発展が領主と農民のいずれと結びつくかによって領主・農民関係の帰趨は大きな影響を受けた

イギリス：農民的商品経済が発展→マナー制が解体

←→東部ドイツ：領主制商品経済が発展→農場領主制が発展

市場経済ないし近代資本主義は、貨幣経済・商品経済の発展を前提としつつも、それだけでは不十分であり、他の要因と結びつくことが必要だった

## 6. 近代資本主義の成立

### A. 近代資本主義とは何か

#### 1) M. ヴェーバーにおける2つの「資本主義」

##### ① 「賤民資本主義」:

単なる営利ないし利潤追求；古来どこにでも見られたもの

資本主義＝貨幣経済ではない；貨幣経済は人類の歴史と共に古い

##### ② 「近代資本主義」

自由な賃労働者たちの労働の上に築かれた「合理的・経営的な産業組織」

近代固有の経済システム

――→

近代資本主義を支えた思想ないし「倫理的態度」(エートス)が「資本主義の精神」

「資本主義の精神」とは単なる「営利欲」ではなく、「自分の資本を増加させることを自己目的と考えることが各人の義務であるという思想」を意味している

「資本主義の精神」が「賤民資本主義」と結びついた「営利欲」(「伝統主義」)を圧倒していく過程こそが近代への画期的な転換を示すものであり、その「資本主義の精神」の形成に不可欠の倫理的要素をもたらしたのが「プロテスタンティズムの倫理」であった

→資本主義は近代固有の現象であり、宗教革命と密接に関係していた

『予定説』の行動原理…宗教的な色彩を失っていくが、近代資本主義を推進める。

#### 2) 資本主義と市場経済

同義に用いられることもある

しかし、市場は政府や共同体を前提としてはじめて機能する

――→

市場経済は資本主義にとって重要な構成要素であるが、資本主義と同じではない

資本主義とは、市場経済と政府と共同体が、時代や国によって、それぞれの独自の形で結びつくことによって色々なパターンが存在しうる

・歴史的段階

重商主義、自由主義、帝国主義、ケインズ主義、新自由主義

この講義では帝国主義の前あたりまでか。

・国・地域

英米型、大陸型、北欧型、南欧型、ライン型

## B.近代資本主義成立に関する諸学説

### 1) 商業資本の産業資本への転化説

ドイツ歴史学派以来の古典的な見解

K. ビュッヒャーの経済発展段階論

家内仕事—賃仕事—価格仕事（手工業）—家内工業（問屋制）—工場制工業

「貨幣経済」の発達の直接の延長線上に産業資本の成立を展望するという意味で、連続的に近代資本主義の成立を捉える考え方と言える

商業資本—→問屋制商業資本—→産業資本

都市商人が発展の担い手

### 2) 小生産者発展説『大塚史学』（大塚久雄）

大塚久雄（1907～1996）

「いわゆる前期的資本なる範疇について」（1935年）

「前期的資本」：資本主義以前の資本諸形態（商業資本・高利貸資本）

これを近代資本主義社会の構成要因である産業資本と範疇的に区別

—→

産業資本はそれ以前の「前期的資本」の転化形態ではない

「貨幣経済」や商業の発達から産業資本の成立が自動的に導き出されるわけではない

『欧州経済史序説』（1938年）で自説を体系化

その特徴：

a) 近代資本主義は、封建社会における商工業活動の拠点であった都市ではなく、農村ではじまった

※『農村』：都市法が適用されない領域の総称

14～15世紀のイギリス農村では領主経済の実質的解体が進行

—→農民に余剰生産物を市場に出す余裕が出るとともに封建的・ギルド規制から比較的自由的な手工業が農村に普及した

—→農村内で都市に対抗する形で社会的分業が進展し都市を中心とする従来の流通機構から自立した再生産圏（農村市場）が形成された（「局地的市場圏」）

b) 「局地的市場圏」の中心的担い手は、農村の独立自営農民（ヨーマン）や手工業者からなる「中産的生産者層」であった

「中産的生産者層」が両極分解し、一部が産業資本家に残りの大部分が賃労働者になった（資本家と労働者の出自は同じ）※ビュッヒャーの場合とは異なる

ともに近代的エートスを身につけていた

c) 「農村の織元」＝マニュファクチャー、「都市の織元」＝問屋制商業資本という形で経営形態を鋭く対比することによって、前者と産業資本との親縁性、後者と産業資本との断絶性を強調

「中産的生産者層」の一部は、農業の副業として毛織物工業をはじめた（当初は

家族労働を基礎とする小規模なもの)

→次第に雇用労働力を加え様々な工程を兼営するマニファクチャー形態へと成長（「農村の織元(clothier)」）

←→

都市の毛織物製造業者（＝「都市の織元」）の経営形態は「農村の織元」とは根本的に異なり、紡糸工や織布工を問屋制的に支配していた（→「都市の織元」は「前期的資本」）

「都市の織元」は農村にも問屋制的な支配の網をかけようとした

→

経営形態と社会的性格を異にする「都市の織元」と「農村の織元」との対立

d) 封建制から資本主義への移行への最終的画期として市民革命を重視

対立関係は14世紀半ばには形成されていたが、「農村の織元」は順調に成長し16世紀には「都市の織元」の存在を脅かすまでになった

→「都市の織元」は絶対王政の産業統制の力を借りて「農村の織元」を抑圧しようとした

←17世紀の市民革命によって絶対王政が打倒されたことに伴い、中世都市を拠点とする問屋制度は破砕され、規制から解放された農村におけるマニファクチャーは満面開花の様相を呈し、18世紀末からの自生的な産業革命への展望が開かれた

e) 産業革命前の都市（中世都市）と産業革命後の都市（近代都市）との系譜的断絶を強調

イギリス産業革命の中心的地であったマンチェスター、バーミンガム、リーズなどは中世都市ではなく、近世以降に農村工業を母胎として発展した新興都市であった

大塚説は、近代資本主義の成立を断絶面にアクセントを置いて説明

近代資本主義の成立の問題を担い手ないし主体の次元で捉えた

←ウェーバーの影響

大塚説の評価

メリット：農村工業への注目；担い手ないし主体の次元で捉えた

デメリット：問屋制や都市商業の役割への低い評価；マニファクチャーの過大評価；都市の対応力への否定的評価；都市と農村の補完関係の否定

### 3) 最近の議論

農村工業が重要という認識は共有されている

#### F. メンデルスの「プロト工業化論」(1972)

17~18世紀のフランドル地域史をモデル化したもの

##### ① 都市商人と生産者

地域外ないし外国市場が開かれて、都市商人の主導のもとでこれまで農村住民の副業として営まれていた農村家内工業が市場向けに編成された

農村の生産者は、問屋制（ないし買入制）という形で都市商人の支配に服した

※『買入制』：生産者は原料を自分で調達するが、製品は都市商人に売るほかないため、買い叩かれて欠損を出すこともある；商人は生産過程に介入しないですむ

##### ② 農村工業と生産者の成立過程

農村工業は農業的に不毛な地域で成立しやすかった

農村工業の生産者は、階層的には零細な土地しかもたないために農業以外の収入を必要とする農村下層民からなっていた

農村下層民の成立経路：

(i) 「農民層分解」：一部の先進地域では競争により農民の階層分解が進展

(ii) 「村落共同体」の階層的構成：相続から排除された農民の子弟が下層民として村落内に定着

##### ③ プロト工業化と人口・家族

プロト工業に伴う生産者（農村下層民）の結婚の増大→農村の社会構造の変化：  
農民世帯

土地を相続した子弟のみが結婚を認められる

相続から排除された子弟は例外的にしか結婚できない

→人口の自動調節機能の内蔵

←→

プロト工業世帯

土地財産がなくても夫婦の家内労働によって生計を立てられる

→結婚年齢の低下、農村人口とりわけ下層民の急激な増加

人口の自動調節機能の解体→来るべき工業社会における労働者層の準備

##### ④ 農村工業地域と商業的農業地域

農村工業の発展とそれに伴う人口の増加

→食糧と原料の供給の外部への依存の増大

農村工業地域と商業的農業地域との一定の分業関係の形成

→工業化を可能とする地域経済圏の準備

都市、特に中小都市が両地域の仲介者としての役割を果たした

⑤ 工業化と工業化の挫折

工業化した地域の多くは農村工業をその前身として持っていたが、  
すべての農村工業地域が工業化に成功したわけではない

挫折した地域もあった

…フランドル、シュレジエン、ブルターニュ

工業化に成功するか挫折するかを規定する要因：

①プロト工業化における商人の資本蓄積と経営上のノウハウ体得の程度

自ら輸出するか委託代理人として業務を行うか

問屋制か買入制（挫折する地域が多い）か

②競争による地域的特化

他地域が先に工業化すると、工業から撤退して農業地域に逆転する地域もあった

…イギリスのイーストアングリア地方、ドイツのラーヴェンスベルク地方

ヨークシャー（毛織物）発展→周辺地域は撤退

近代資本主義の成立を考える場合には、農村工業の成立過程、都市（都市商業と都市工業）と農村の関係に注意すべき